巻頭言

自学教育の開発と評価を想う

本学は、ここ数年来、大学教育の基本を学士課程教育において、学士課程教育の活性化と改革を進めています。いわゆる新教育改革であり、ここではカリキュラムの改革を中心とした従来型の教育改革の範疇を越え、入学生の安定的な導入や卒業生の就業支援の戦略を、アドミッション戦略やディプロマ戦略として策定し、教育改革に組み込みました。このごろでは常套句となったアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシーそしてディプロマ・ポリシーの 3 ポリシーを統合した教育目標の設定であり、社会の期待に対してどう応え、社会に対してどう貢献するか、についての教育実践であります。

大学はもともと教育機関であり、次世代の人材育成、人的資源の開発という社会に無くてはならない職務を分担し、このことを大学の社会的な存在の根拠としています。大学の自治とか、教育の自由、教員の教育権等は、あくまでも社会から負託された範囲で成り立つものであり、大学に無条件で与えられた裁量ではないことは確かです。だから、大学の教育制度や教育内容は社会の諸制度の中の一つとしてあるのであり、常に社会の持続的な発展に参加することが基底にあります。このためにも、大学は社会の変化を先取する形で自らを常に改革し、進化し続ける宿命にあるのです。

ところで、大学教育がこの期待に応えるためには、時代を読み次世代が活躍する社会状況を想定し構想する確かな能力と態度が求められます。このために大学は、過去や現在の状況を観察・調査し、分析・認識し、点検・評価し、その結果を外挿して未来のあるべき人材養成のための教育のあり方を模索してきました。過去や現在の状況についての分析・認識や点検・評価は観察、測定、調査等と呼ばれる一定の尺度をもって直接的あるいは間接的に計測（Measurement）することで行われてきました。そして、この計測の精緻さ、正確さ、さらに再現性の高さによって、得られた分析・認識や点検・評価の結果は信頼され、より普遍的なものとして社会に受け入れられてきました。しかし、過去や現状についての分析・認識や点検・評価の信頼性がより高く、より一般的であればあるほど、より高い確率で未来を予測させる根拠となるのでしょうか。歴史は間違いなく繰り返すのでしょうか。

かつてもてはやされた未来学の発想に捉われるのではなく、持続可能な社会や大学のあり方を想定し、構想し、設計し、実現するためには、この過去外挿に加えて、新たな知的活動を模索する時期に来ているのではないでしょうか。

未来社会をより正しく予測し、その社会に必要な人材養成を進めるための教育制度や内容を構想し、実施し、その成果をどう評価し、更なる改善・改革にどう反映させるか。この構想、実施、評価は大学教育を含めたすべての教育活動を成立させるための基本的な研究活動

の対象であり、かつ重要な教育活動の一部だといえます。これまでに多くの教育関係の研究者がこの点については論及されてきました。この課題は、一般論としての論理性と概念性の確かさに加えて、個別事象に対する課題の抽出とその解決策の提案を必要とします。つまり、自学教育論の開拓研究による自学教育の確立であります。だから、一人の優れた高等教育学者にまかせておけば解決できるというようなことではなく、現場の実態に立脚した課題の設定とそのための多様な解決法の開発が必要なのです。いうならば、中部大学の教育論と教育実践論の研究開発が求められているのです。

この中部大学教育論をより確実に実践するためには、この教育論と実践論を正しく評価する評価論も必要となります。つまり、個別大学における大学教育の自学展開論の開拓と実践に結び付く教育評価論の研究です。このためにどんな尺度を用いて評価（値踏み）するか、Measurement 評価ではなく、Evaluation と呼ぶべき評価をどう開発するかです。

国や社会は大学の機能別分化、個性輝く大学教育、個性的な人材養成のための教育とか、教育の枠組みに個を基本として、大学や個人の多様な発展を重視しています。それは画一化、規格化、さらには管理下と呼べる２０世紀型の教育の基本理念とは相容れない主張です。この主張はグローバル化や知識基盤社会が世界的に進展し、国籍を問わず優れた人材の獲得競争が激化する今日の社会情勢においては、あらゆる意味において個性的なフロントランナーを育成することがすべての大学に求めているからです。他者の模倣や他者からの値踏みに捉われることなく、自らの判断と尺度で堂々と構想し、実施し、評価し、自己運動を円滑に展開する論理的で技術論的にも満足のいく教育制度と教育内容を開拓し、実践することです。未来を拓く研究は多くの研究者を巻き込む魅力を潜在的に持っています。この魅力を可能な限り生かせば、未来志向の大学教育研究は大きなうねりとなって全学に広がるに違いありません。

自学教育を開発するための研究はいろいろな切り口から着実に進められつつあります。その具体的な研究事例をここに「中部大学教育研究」11号として刊行することになりました。本号には特別寄稿として、寺﨑昌男先生に寄せていただきました。厚く御礼申し上げます。また、本号の企画、編集そして校閲を担当していただきました坪井和男中部大学学監、大学教育研究センター長を始め関係者の皆様に対して感謝いたします。

2011年12月

学 長　山 下 興 亜